

7. 遺物の管理・保存修復

考古学的遺物から見た遺跡の保存・整備計画： サッカラ地区の場合

高宮 いづみ*¹・青木 繁夫*²

1. はじめに

メンフィス・ネクロポリスの遺跡保存・整備計画を考えるに際して、通常、不動産物である考古学的「遺構」が保存・整備の中心的な対象になるのは必然である。したがって、近年多くの研究者グループがこの路線に沿った調査・研究を行っており、筆者らが実施した2007年度の調査（青木、高宮2008）もその例であった。しかしながら、もう少し視点を広げると、現地に残存する遺構の他に、発掘調査等で遺構周辺から出土した動産物の「遺物」も、遺跡の保存・整備計画を策定するに際して考慮しなくてはならない重要事項に違いないと思われた。それというのも、多くの「遺物」は元来歴史的に遺構と密接に関連した遺跡の一部であり、歴史的考察の観点から両者は切り離せない性格を持っているだけではなく、実際現在のエジプトの場合、遺物を展示・収納する施設群が遺跡内に配置されていて、物理的にも遺跡整備に影響を及ぼしているからである。

1991年12月に始まった早稲田大学のアブ・シール南丘陵遺跡の発掘調査によって出土した遺物は、しばらくの間、サッカラの沖積低地に近い台地上に設けられた早稲田大学建造の倉庫に収蔵されていたが、昨年2007年に、同じサッカラにあるが、台地下に新たに建造された考古最高評議会（以下SCAと略述）の倉庫「Selim Hassan Storage Museum」に移動された。旧倉庫が著しく手狭になっていたため、新しく広い倉庫という良好な遺物整理・研究と保管のための環境を提供して頂いたことについて、まずはSCAに心から感謝の意を表したい。未だ移動された遺物の新倉庫内における配架と整理は始まったばかりであるが、新倉庫への遺物の移動を契機として、サッカラ地区の倉庫における遺物の保存・管理状況を調査し、改めて動産物である考古学的遺物と遺跡の保存・整備計画との関連を考察してみることにした。その結果、おそらく、遺物研究と遺跡倉庫の観点から、21世紀の遺跡の保存・整備計画に何らかの提言をすることができるであろう。

本稿では特に、2008年度調査中に筆者らがクリーニングと整理作業を実施したレリーフおよびそれと対称的な性格を持つ土器を、考古学的「遺物」の例として取り上げた。なお、本科学研究費の課題が対象とするメンフィス・ネクロポリス地区はアブ・ロアシュからダハシュールまでの広い地区を対象とするが、ここではアブ・シール南丘陵遺跡と倉庫を含む「サッカラ地区」に絞って考察を行った。

2. 古代エジプトの多様な「遺物」

考古学では、過去の人類が遺したもののうち動産物を通常「遺物（artifacts）」の名称で呼んでいる。元々

*1 近畿大学文学部准教授

*2 サイバー大学世界遺産学部教授

のコンテクストから切り離しても独立した意味を持つので、しばしば「遺跡 (sites)」から持ち出されて収蔵・展示される。遺跡の保存・整備計画を考えると、たいてい遺物は中心的な関心事項にはならないかもしれない。それというのも、遺物は一端遺跡から取り上げられて別の場所に保管されれば、遺跡自体の保存・整備とは切り離して扱うことができるからである。

古代エジプトの遺跡からは、実に多様な遺物が出土する。通常動産物に分類される遺物として、アブ・シール南丘陵遺跡の出土品から例を挙げただけでも、土器、石製容器、彫像、ステラ（石碑）、装身具、ファイアンス製の容器や護符、青銅製の像や容器などがある。しかし、ステラや彫像等は、本来遺構との密接な関連の中で適切な場所に据えられていたという意味では、遺跡や遺構というコンテクストから切り離しては存在意義を持ち得ないものである。さらに、壁面装飾の一部であった彩色画断片やレリーフ断片、ファイアンス製タイルなどは、明らかに元来遺構の一部である。

このように改めて「遺物」の性格を考えてみると、遺跡や遺構と容易に切り離すことはできず、遺跡の保存・整備計画に当たっても、その一部としての性格を考慮する必要があることが明らかである。また、実際これまでも、サッカラ地区を含めたエジプトにおいて、発掘調査で出土した遺物の多くは遺跡の近くに建てられた倉庫に収蔵されており、近年その一部はサイト・ミュージアムに展示されるようになっていて、遺跡と遺物の近接性が保たれてきた。このために、遺物を展示・収蔵するサイト・ミュージアムや倉庫群が、遺跡保存・整備計画と密接な関係を持つことになっている。

そこで、長期的な遺跡保存・整備計画を見据えると、早急な課題である遺跡のリスク・マップの作成と対照的な観点に立って、初期の段階から積極的かつ根元的に遺物と遺跡の関係を考察しておいた方が良いのではないだろうか。

3. サッカラ地区における近年の施設整備と「Selim Hassan Storage Museum」

(1) サッカラ地区の遺跡整備

エジプトにおける遺跡管理の担当部局である SCA は、近年エジプト全土で遺跡整備を熱心に進めており、サッカラ地区においても整備が急速に進んでいる。まずは、近年の SCA による遺跡整備の状況について報告する¹⁾。

かつて SCA のサッカラ地区を管轄する事務所は沖積地際のサッカラ台地上に設けられており、その周辺に建てられた倉庫群に、同地区から発掘された遺物が収められていた。外国調査隊の宿舎や倉庫、レストハウスなどもその近くに建設されていて、早稲田大学調査隊の倉庫もその一角に位置していた。しかし以前から、サッカラ地区の台地上にはほぼ全面にわたって古代の遺構や堆積が存在し、上記のような施設群も古代の遺跡の上に位置していることが認識されていた。同時に、台地上の遺跡の上にこうした施設群があることによって、そこで使用する水が遺跡にダメージを与える可能性があること、台地上の 20 世紀の建造物が遺跡の景観を損なっていること、施設群下の遺跡調査ができないこと等の問題があることも認識されていた。

そこで近年、SCA が積極的に遺跡整備を進め、これらの施設群の配置が大胆に変更されることになった。現在着々と進行中の新しい整備計画²⁾では、これまで台地上にあった上記のような施設群を、ほぼ全て台地下に移転することになっている³⁾。これによって、先に挙げた 3 つの問題は解消されつつある。

移転先は、サッカラ遺跡のゲート（ウナス王ピラミッドの葬祭殿近くに位置する、遺跡の玄関）から北に向かって続く舗装道路（Fig.1）によって結ばれ、大きく 2 つの群に分けられる。比較的ゲートに近い「南の施設群」（仮称）と、ややゲートから離れた「北の施設群」（仮称）である。前者は、ゲートとチケット・オ



Fig.1 遺跡ゲートから続く舗装道路と南の施設群の駐車場



Fig.2 カフェテリア



Fig.3 視聴覚講堂（Visual Auditorium）

フィスに続く遺跡見学者（多くは観光客）にとっての導入部分および遺物収蔵施設群として、後者は、観光客が直接関わりない遺跡管理と学術研究のための施設群として設計されていると思われる。

南の施設群は、駐車場 (Fig.1)、カフェテリア (Fig.2)、視聴覚講堂 (Visual Auditorium) (Fig.3)、博物館事務所、「イムヘテプ博物館 (Imhetep Museum)」、サッカラ地区第1倉庫、サッカラ地区第2倉庫 (「Selim Hassan Storage Museum」) (Fig.4) から成る。南の施設群の中心の一つは、「イムヘテプ博物館」という小規模であるが、美しいサイト・ミュージアムである (Fig.5)。この博物館は、第3王朝ジェセル王治世に最初の石造ピラミッド (階段ピラミッド) を設計したとされる建築家イムヘテプの名を冠している。中心となる展示室には、階段ピラミッドとジェセル王およびイムヘテプに関連する展示があり、別の1室に、階段ピラミッドの発掘と修復に約70年の生涯を費やして尽力してきた故ロエール氏を偲ぶ部屋が設けられている⁴⁾。その他の教室には、サッカラ地区から出土した傑出した遺物が展示されている。博物館の南に建てられた視聴覚講堂⁵⁾と合わせて、観光客にサッカラ遺跡の全体像を提示し、遺跡に対する関心を喚起する目的で設計されたと思われる。駐車場に面して設置されたカフェテリアは、現在サッカラ唯一のカフェテリアとして、訪問者に休息と食事の場を提供している⁶⁾。この博物館に隠れるようにして、一般観光客はほとんど立ち入れない2つの大型倉庫 (サッカラ第1倉庫と第2倉庫「Selim Hassan Storage Museum」) が建造されており、サッカラ遺跡出土遺物の収蔵庫としての機能とともに、発掘調査後の遺物の整理・研究を行うラボラトリーとしての機能を担っている。これらの倉庫の北側にはまだ広い空地が残っていて、将来倉庫を増築することも可能であろう。

北の施設群 (Fig.6) は、南の施設群からはやや離れたところ (初期王朝時代のマスタバ墓群の東) に位置し、2008年夏時点では未完成ながら、サッカラのSCA事務所、ポリス・ステーション、調査隊滞在用の宿舍として用いられる予定のヴィラから成る。

これらの施設群は、現在まだ稼働していない部分があるものの、全体として良好な計画に基づいて建設されていると思われる。

(2) Selim Hassan Storage Museum

早稲田大学が発掘調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡から出土した遺物は、他の外国調査隊が発掘した遺物とともに、現在SCA所有の倉庫「Selim Hassan Storage Museum」⁷⁾に収蔵されている。先にも述べたように、近年ようやく完成したこの倉庫は、南の施設群の北端の位置を占め、サッカラ地区の第1倉庫とともに、サッカラ地区の出土遺物の収蔵施設およびラボラトリーとしての役割を担っている。一旦この倉庫に収められた遺物は、SCAによって厳重に管理されるので、遺物の整理・保存・研究作業は全てこの倉庫の中で行わなければならない。

Selim Hassan Storage Museum は、倉庫ブロックと事務所・作業ブロックの2つから成っている。倉庫ブロックは細長い通路を中心に、それに面して入口を持つ7室の収蔵室から成り、事務所・作業ブロックは、所長室、事務室、スタディー・ルーム、薬品処理にも対応する作業室、トイレ等から成る。後者は、単に遺物を収蔵するだけでなく、空調や水道設備も備え、科学分析や保存修復などの化学薬品使用に耐えうる作業室 (Fig.7) を備えていることが特徴である。

アブ・シール南丘陵遺跡出土の遺物が収められているのは、倉庫ブロックの1室で、考古庁によってスチール製の丈夫な大型棚20基と引き出し付きの収納棚4基が備えられており、棚の間の作業スペースも比較的ゆったりとしている (Fig.8)。倉庫における整理・保存・研究などの諸作業は、この棚の間の作業スペース、共有の通路部分および事務所・作業区画のスタディー・ルームで行えるようになっている。ちなみに、倉庫



Fig.4 イムヘテブ博物館と第1倉庫、第2倉庫



Fig.5 イムヘテブ博物館入口



Fig.6 建設中の北の施設群

ブロックの他の部屋には、エジプトの他に、フランス、ドイツ、オーストラリア、ポーランドという各国調査隊の発掘出土品が納められている。

遺物収納とラボラトリー機能の他に、Selim Hassan Storage Museum という名称から推察して、この倉庫には「見せる倉庫」として、ある程度展示の機能が期待されていると考えられる。



Fig.7 Selim Hassan Storage Museum の作業室



Fig.8 収蔵庫の遺物収納状況

4. レリーフ石材・断片の倉庫内における作業と研究

(1) 「レリーフ」の性格

冒頭で述べたように、本稿で遺跡の保存・整備計画と関連する「遺物」の例として取り上げた一つが「レリーフ」(すでに建造物から離れてしまっていた壁面装飾で、大型完形石材から小型断片までを含む)である。ここで取り上げた理由は、第1に、レリーフがしばしば「遺物」として扱われることがあるものの、元来は建造物の一部であり、遺跡・遺構の保存・修復計画と最も密接あるいは直接に関連する出土品であること、

第2に、レリーフが最もかさばるために、倉庫の利用方法に大きな影響を与えられたこと、第3に、近年筆者らが倉庫内においてレリーフを扱った作業を実施しているために、具体的な例を提示できることである。

後述するように、ここで取り上げた「レリーフ」は、多くが元来カエムワセト王子が建立した石造建造物の壁面装飾の一部であった。本遺跡から出土したレリーフは極めて美しいので、単一のブロックや断片でも、博物館の展示に耐えうる審美的価値を持っている例が少なくない。

(2) カエムワセト王子の石造建造物とレリーフ装飾

現在 Selim Hassan Storage Museum において早稲田大学が与えられた倉庫スペースに納められた「レリーフ」は、量的にも数的にも、大半がカエムワセト王子が創建した石造建造物に由来する⁸⁾。1991年12月に始まった第1次発掘調査から近年まで、長期間にわたってアブ・シール南丘陵遺跡頂部付近から継続的にレリーフが出土し続けた。その総数は、大型のブロックと小断片を合わせると約1500点に達する。

1991年12月に、早稲田大学は初めてアブ・シール南丘陵遺跡頂部の発掘調査に着手した。間もなく石灰岩で築造された大型建造物が検出され、この建造物が古代エジプト新王国時代第19王朝ラメセス2世の第4王子カエムワセトによって創建されたことが明らかになった。南北約25m、東西約30mの規模を持つこの建造物は、古代エジプト史上極めて重要な意義を持つが、発掘調査時には、基礎部を残して上部構造がほとんど破壊されていた。元来の建造物の形態は、僅かに残された床と基礎部の痕跡や周辺から出土した建築部材から復元され、周辺から出土した夥しい数のレリーフが刻まれたブロックと断片から、建造物の一部の壁面（ポルティコ、前室、奥室の内側壁面）が元来美しいレリーフで装飾されていたことも推測された。

平均すると壁面装飾の残存率は20%にも満たないとはいえ、これまでの考察の結果、一部の壁面については、ブロックや断片の接合から比較的大きな壁面装飾が復元できることが明らかになっている（高宮2006, 2007）。メンフィス・ネクロポリス全体を見渡したとき、カエムワセト王子の建造物が新王国時代のランドマークとして重要であった⁹⁾ことを考えると、この建造物に由来するレリーフの研究は、将来的に現地における遺構の現物をういた壁面復元や遺跡内の別の場所における復元展示に結びつく可能性がある。

(3) 倉庫内におけるレリーフの記録・整理・研究・保存作業

上述のように、Selim Hassan Storage Museum は、倉庫機能と共にラボラトリーとしての機能を併せ持ち、発掘調査以降、倉庫内で行われるべきレリーフの整理・研究作業は実に多岐にわたる。そうした作業の一部はすでに旧倉庫内で実施されたが、ここでは、倉庫に求められる多様な機能を明確化する目的で、必要な主要作業を挙げてみる。なお、旧倉庫における作業進行状況については、註に記した。

①基礎記録の作成

倉庫に搬入された直後に、個々のレリーフが施された大型ブロックおよび断片について、基礎記録の作成を行う。本調査では、遺物に遺物番号を注記し¹⁰⁾、メモ写真の撮影、モチーフの原寸大フィルム・トレース、石材やモルタルの観察等を行った。実質的に、この時に作成した基礎記録が調査隊にとっての倉庫の「入庫記録」に近い意味を持ち、調査隊ではこれらの情報をデータベースで管理している¹¹⁾。

② SCA の登録

発掘調査の出土遺物のうち、完形品で博物館において展示可能なものは、通常調査期間内に SCA のシステムに従って登録が行われる。登録遺物は、遺跡事務所に保管されている調査隊別の台帳に、写真とともに基本情報が記録される。SCA による正式な保管・管理の対象となるのが、この登録された遺物である¹²⁾。

レリーフについては、完形のブロックが登録される¹³⁾。これらはしばらく特別な箱に収められて倉庫内の一角で厳重に管理されるが、SCA の決定に従って、エジプト各地の博物館に移動される可能性がある。

その他多数の遺物は、「研究用資料 (study materials)」の位置づけにあり、登録された遺物ほど SCA によって厳密な管理は行われない。

③緊急保存処置

レリーフ装飾は、石材表面の僅かな凹凸に最も重要な歴史的情報が含まれており、レリーフの保存状況に対する発掘直後の急激な環境変化の影響が懸念された¹⁴⁾。そこで、出土直後（概ね同一調査年次内）に、主にパラロイド B72 を用いて緊急保存処置を講じることにした¹⁵⁾。

④倉庫内の収納整備

倉庫内に適切にレリーフを配置・収納することは、作業効率や整理の点から見て、極めて重要である。特に大型ブロックのレリーフはサイズも大きく、重量もあるため、置き場所に制約がある。

大型ブロック（長辺約 30～150cm）(Fig.9) は、現在移転直後の倉庫内において、スチール製の棚上に無秩序に置かれている¹⁶⁾。一方小型のレリーフ断片（長辺約 1～30cm）は、発掘調査直後からプラスチック製の小型コンテナ（長辺約 50cm）に出土年次別・場面別に分類して収められていたが、移転直後の新倉庫においては、一時的に、全てのコンテナが倉庫入口西側のスチール製棚最上段にまとめて積み上げられている。

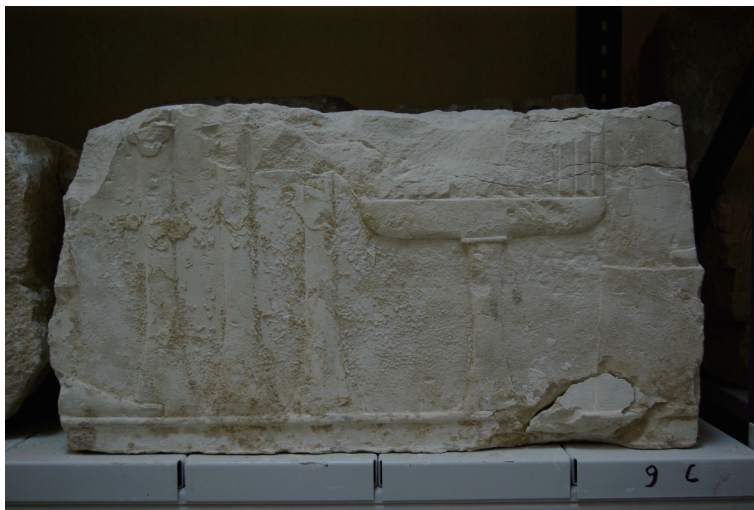


Fig.9 棚上に収納された大型レリーフ・ブロック

今後、本格的な保存・修復処置や記録・研究等の作業を円滑に実施するために、まずはレリーフの置き場所を整理する必要が生じており、今年度から西坂朗子氏が中心となって、その準備作業に着手した。

⑤長期的保存処理とクリーニング

レリーフ断片の多くは、出土直後に緊急の保存処理を試みたが、長期的な保存処理には着手していなかつ

た。また、レリーフの美観を考慮したクリーニングもほぼ未着手の状態であった。しかし、本来は、長期的な展望に立ったレリーフの保存処理が必要である。

新倉庫に移転後の2007年度から、石材の保存・修復専門家である苅谷浩子氏に参加していただき、本格的な大型ブロックの保存状態に関する調査と保存処理を開始することができた。そして2008年度から、筆者らが一部小断片のクリーニングも開始した¹⁷⁾。

⑥詳細記録・観察作業

①の基礎記録は、発掘調査直後の暫定的な記録であって、学術調査の最終記録としては不十分である。特に、出土時に表面が汚れていた断片については、クリーニング後に改めて観察や記録を行う必要がある¹⁸⁾。

⑦接合作業と壁面装飾の復元研究

建造物の壁面装飾研究にとって最も基本的な作業の一つが、復元のための断片やブロックの接合作業である。接合作業には2つの段階があり、第1段階が、同一石材から割れた断片同士を割れ口の形状を手掛かりに接合する作業、第2段階が、隣接するブロック同士をレリーフのモチーフを手掛かりに接合する作業である。

この作業のために、広いスペースとオーガナイズされた遺物配架環境が必要であるため、今後倉庫内の収納整備後に、本格的な接合・復元作業を行う予定である¹⁹⁾。

⑧作業終了後の収納と展示

上記のような作業が終了した後には、レリーフはなるべくコンパクトに倉庫内に収納される。

ただし、倉庫名が示すように、壁面装飾が良好に復元できた一部のレリーフ群やとりわけ重要な大型ブロックについては、棚上にある程度展示と研究者用の公開を意識した配架を試みる。可能であれば、壁面装飾を復元した形での展示が望ましいであろう。

(4) 小結

かつて遺跡内の倉庫は主に貴重遺物の収納を目的として建造されていたが、前項で挙げたように、レリーフについては、記録作成、保存・修復処理、接合・復元、観察・研究等の倉庫内での多様な作業が必要である。ここで取り上げたような、大型石造建造物の複数室に相当するようなレリーフの量は異例ともいえる。しかしながら、歴史的に重要な資料の保存と、レリーフの倉庫内における作業内容を考慮すると、遺跡内にラボラトリー機能を備えた大型の倉庫が不可欠であり、遺跡整備計画の中で、積極的にラボラトリー機能を備えた倉庫の位置づけを考えていく必要があることが明らかである。

前述のように、レリーフは本来建造物＝遺構の一部でありながら、発掘調査直後には暫定的に遺物として扱わざるを得ない性格を持っている。そのために、発掘調査直後に一旦は倉庫に収められて、遺物のように扱われる。しかし、上記のように時間をかけた研究の進展結果によっては次第に遺構に近づいていき、最終的には遺構の一部として復元され得るような潜在的可能性を持っている。実際、アブ・シール南丘陵遺跡出土の一部のレリーフ壁面装飾は、これまでの復元考察の結果、遺構の一部として現物復元できる可能性が出てきた。すなわちレリーフは、遺跡においてどの程度現物を用いた復元を行うのかという、基本的な遺跡整備の方法や方針と密接に関連することになる遺物である。

このようなレリーフの特殊な性格については、かねてから SCA にも十分な認識がある一方で、取り扱いに関する迷いと時期的な変遷があったと思われる。20 世紀中葉までの発掘調査で検出されたレリーフ付きのブロックは、遺構の一部と考えられたために、現地にそのまま残されるものも多かったようである²⁰⁾。また、当時は倉庫の主たる機能は貴重な完形遺物の保管にあって、倉庫とラボラトリーのスペースは極めて小さかった。近年文化財保存を重視する傾向が、建造物の一部であるレリーフも保管環境の良い倉庫に収める方向性を加速させている。しかしそのためには、規模が大きく、ラボラトリー機能を備えた倉庫の必要性があることを、アブ・シール南丘陵遺跡の例が改めて明示したと言える。

実際に 1991 年のアブ・シール南丘陵遺跡発掘調査開始当初は、初期の方針を踏襲して、レリーフはたとえブロックが完形であっても、遺物として SCA の登録の対象とはならなかった²¹⁾。近年、保存良好な完形のブロックは遺物として登録されるようになり、管理面では手厚く扱われるようになったが、皮肉なことに、それはすなわち本来壁面装飾の一部であるレリーフが、遺構や近接する壁面装飾から切り離されて、単独で遠方の博物館に移動される可能性が高まったことをも意味している。

建造物の壊れた部分はどこで保存されるべきなのかという問題は、遺跡保存・整備計画に関連するだけではなく、今後解決されるべきエジプト全体の文化遺産管理にとって重要な問題である。

5. 土器の倉庫内における整理作業と研究

(1) 土器の性格

レリーフの他にもう一つ遺物の例として取り上げたのが、「土器」である。ここで取り上げた理由は、第 1 に、土器が遺跡と切り離して「動産物」と考えられる典型的な遺物であること、第 2 に、土器はレリーフと並んで遺物の中で最も数が多いこと、第 3 に、土器がレリーフ等の他の遺物とは性格が異なる豊かな情報源であることである。

土器は、本遺跡において、出土点数からすれば最多であり、重量からしてもレリーフに次いで総重量が重く、量的にもレリーフと同等かそれを凌ぐ遺物である。しかしそれにもかかわらず、通常伝統的なエジプト学研究や SCA の遺物管理体制の中では土器があまり重視されてこなかったのは、通常完形ではなく断片で出土するためであり、彩文土器等の少数の例外を除けば、単独で博物館に展示できるような審美的価値に劣るからであると推察される。

(2) アブ・シール南丘陵遺跡出土の土器

アブ・シール南丘陵遺跡出土の土器は、古くは古王国時代初期からローマ時代後期までに年代付けられる。特に、丘陵東側に築かれた「石積遺構」とシャフトに関連する古王国時代初期、2 基の岩窟遺構と関連する中王国時代、アメンヘテプ 2 世とトトメス 4 世によって丘陵頂部に「日乾煉瓦遺構」が建造された新王国時代第 18 王朝、カエムワセト王子によって石造建造物が築造された新王国時代第 19 王朝、その後に丘陵頂部で頻繁な活動が行われた末期王朝時代の土器群は、古代エジプト史を理解するために重要な情報を提供している。

本遺跡から出土した土器は、完形品のものも稀に含まれるが、多くは破片である。しかし完形品でなくても、遺構の年代やそこで行われた行為（すなわち遺構の機能）など、非常に重要な歴史的情報を提供している。

(3) 土器の収蔵と作業

土器についても、倉庫において概ねレリーフと同じ作業が必要なので、ここでは詳細の繰り返しを割愛するが、発掘調査時の取り上げと倉庫への収蔵の段階から、レリーフや他の遺物とやや異なる方法で取り扱われる部分がある。

アブ・シール南丘陵遺跡調査において、土器は、発掘調査時に他の遺物と同様に全点取り上げを実施しているが、断片群を層位ごとにまとめて遺物番号を付し、袋に入れて管理している（他の遺物は、多くが1点取り上げである）。出土土器の保管は、現在 Selim Hassan Storage Museum の他に、丘陵頂部に建造された小規模な「Study Room」と岩窟遺構に分散されている。少数の完形品（主に中王国時代の土器）は、SCA の登録が行われたが、その他多数を占める莫大な量の断片群は研究資料（study materials）の扱いであるため、特に倉庫での保管は義務づけられていない。そこで実際には、公式の Selim Hassan Storage Museum 以外に、発掘調査遺跡近辺で study materials の保管場所が必要になっているわけである²²⁾。

土器片群については、現在復元を含めた作業と研究が進行中である。

(4) 小結

先に述べたように、土器は動産物としての遺物の典型的な例であり、多くは断片となって出土することから、SCA の登録や倉庫における厳密な管理の対象とはならない。他方で、発掘調査時に遺物として取り上げた場合は、非常に多量に出土するため、公式倉庫以外のどこかに保管場所を設ける必要が生じている。現在、調査隊ごとに土器の取り扱い方法には自由度が高く、保管場所は SCA の計画に入っていない。しかし、土器が持つ豊富な歴史的情報を考えると、将来の研究発展のためには何らかの保管場所を設けておくことが望まれる。

土器は確かに動産物として遺跡から切り離して扱いやすい遺物であるが、土器がその場所に残された背景には、周囲の状況が深く関わっている。例えば、アブ・シール南丘陵遺跡の中王国時代の場合、複数の土器群が奉納品として岩窟遺構の中に据えられており、岩窟東側斜面から出土した夥しい数のミニチュア土器群も、岩窟に関連する宗教的行為と密接な関係があったと推測されている。このことから、土器は本来遺構と密接に関連し、一群がセットとして使用され、廃棄されたコンテキストの中で捉えられるべきものであることは明かである。

6. 遺跡倉庫の機能と必要設備

(1) 倉庫の機能

上記のように、21世紀初頭の現在の遺物に関連する諸状況を見直すと、大別して下記のような遺跡倉庫の機能が改めて認識される。そこには、20世紀の古い認識から脱却して、21世紀の新しい遺物研究・管理体制を目指す方向性が反映されている。

① 遺物保管場所としての遺跡倉庫

20世紀初頭から最も重視されてきた倉庫の機能は、遺跡内における遺物の保管である。すでに SCA はこれについて十分な設備と管理システムを備えるべく努力しており、SCA が登録した重要遺物は、セキュリティ

ティーの観点から極めて慎重に管理されてきた。

21世紀に完成した Selim Hassan Storage Museum を含むサッカラ地区の新しい倉庫群においては、遺物の盗難や紛失を防ぐために、いっそう充実したセキュリティー・システムが試みられている。

②研究・作業場所（ラボラトリー）としての遺跡倉庫

20世紀の倉庫ではあまり重視されていなかったが、新しい SCA の遺跡整備で大幅に強化された部分が、遺跡近辺の倉庫における研究・作業場所としての倉庫の機能である。レリーフや土器の例でも述べたように、研究作業には、出土遺物の整理作業（接合や分類）、各種記録作業（写真撮影や実測）、分析（科学分析等を含む）、保存・修復作業等が含まれる。

レリーフや土器の例に挙げたように、発掘調査直後には分からなかったことが、その後のラボラトリーにおける綿密な調査と研究によって明らかになる場合は非常に多い。むしろ今日では、第2の発見場所として、ラボラトリーを位置づけることができる。したがって、ラボラトリーの機能の充実に伴い、収納機能を越えた、規模の大きな倉庫が必要になるであろう。

③展示場所としての遺跡倉庫

近年エジプト各地の遺跡において、サイト・ミュージアムが構築されつつあり、遺物が出土した場所の近くで展示される機会が増加した。サッカラ地区においては、イムヘテプ博物館が主要なサイト・ミュージアムの役割を果たしているが、さらに Selim Hassan Storage Museum に、単なる遺物収蔵用の倉庫として機能するだけでなく、サイト・ミュージアムに展示しきれない遺物を、見やすく展示する機能を兼ね備えることが当初から期待されていたと思われる。

実際、サイト・ミュージアムの限られたスペースに展示される遺物以外にも、展示に耐える審美的価値を持ち、さらに歴史的重要性を持つ遺物は豊富に存在する。研究者や熱心な観光客のために、遺跡倉庫が収蔵機能と共に展示機能を備えることが望ましいであろう。

(2) 必要設備

上記のような3つの機能を考慮したとき、一般的に21世紀の倉庫にはそれぞれの機能に合わせて、新たに下記のような設備が必要であると考えられる。

①遺物保管場所としての遺跡倉庫の設備

1) 収蔵品の管理設備とシステム

動産物である遺物の所在位置が明確で、必要な遺物に容易にたどりつけて、出し入れが簡単にできる設備とシステムを備えることが必要である。

そのためには、遺物登録カードに遺物が置かれている住所番号の情報が記されなければならない、収納棚のそれぞれに住所を割り振り、遺物の所在が簡単にわかるようなシステムを構築しておく必要がある。さらに石灰岩レリーフなどのような重量物を移動する場合、常に落下や衝突によって遺物に損傷を与える危険と取扱者の怪我の問題が存在する。コンテナに収納する、あるいは重量物であればパレットの上に乗せ、手動フォークリフトや台車などを使用して移動するなどの措置が必要である。

2) 保管環境の整備

遺物を保存管理するための温湿度管理や砂塵などの進入を防止できる環境調整機能を有していることが必要である。

サッカラ地区における倉庫群のような砂漠に作られた遺物倉庫での最も大きな問題として、窓やドアなどの隙間から入ってくる砂がある。砂は様々な化学物質を含んでいるので、彩色などに影響を与える可能性がある。砂の進入を防止し、仮に入ってきてても遺物の表面に堆積しないように覆いをかけるなどの工夫をする必要がある。土器などはたくさんの塩類を含んでいるため、温湿度管理をしっかりと行わないと土器中に含まれる塩類が結晶化と融解を繰り返して損傷を起こす。また、金属製の収納棚は、その塩類によって腐食してしまう場合がある。そのような作用を起こさないためにも、温湿度管理は重要な課題である。木製品に関しては、昆虫による食害などの被害を見受けることがある。昆虫による被害を防止するためには、総合的病害虫管理システムによって、外部からの昆虫の侵入対策や被害を受けた木製品をどのように保存していくかを考える必要がある。

3) 火災対策

遺物の保管管理において火災は大きな脅威である。火災によって焼損した遺物を元の姿に戻すことは不可能であり、非常に多くの情報が失われることになる。したがって、予防措置や被害を最小限に押さえるための設備及び対策が必要である。

防火対策としては、倉庫内には可燃物を置かないこと、倉庫がある区域内では火気の使用を禁止することなどが挙げられる。設備としては、火災警報装置、防火シャッター、消火器などの設置を行い、消防訓練などを実施しておくことが大切である²³⁾。

4) 地震等の自然災害対策

エジプトは比較的地震の少ない国であるものの、1992年のカイロ南方地震に見られるように、実はカイロから下流のナイル川流域においては地震発生頻度が高いにもかかわらず、ほとんど地震対策が取られてこなかった。今後は、倉庫の倒壊も含めて収納棚の転倒や遺物の落下防止など、安全に遺物を保管できる対策が必要である。

(3) 研究・保存作業場所（ラボラトリー）としての遺跡倉庫の設備

①考古学的研究のラボラトリーとして

考古学的研究のラボラトリーには、遺物の整理を行い、それらの遺物の写真や実測図を取り、情報を発信する機能がなくてはならない。そのためには遺物の写真記録を撮影するためのスタジオや、遺物の分類・観察・復元作業、あるいは図面作成に必要な設備や機材を用意しておかねばならない。

主な機材としては写真撮影関係のカメラ、三脚、照明装置、撮影台、実体顕微鏡、三次元実測装置、製図台、パソコンなどが挙げられる。

②科学分析のラボラトリーとして

遺物は様々な情報を持っており、考古学的手法による研究だけでなく、自然科学的手法によっても有益な情報が得られる。特に材質や製作技法、年代測定、産地同定、環境復元などの分野では自然科学的手法による研究が重要になってくる。

1) 材質を知る

遺物がどのような物質で作られているかを知ることは、遺物を理解する上で欠かせないことである。そのためにはまず肉眼と顕微鏡でよく観察して、遺物の材質に関して何を知りたいかを明確にすることから始まる。その結果によって分析手法が決まってくる。

金属などの無機物で作られた遺物の元素やその化学組成を知るための分析方法としては、蛍光 X 線分析法、X 線回折分析法、高周波誘導プラズマ発光分光分析法、放射化分析法などがある。

染織品などのように有機物で作られた遺物の材質を同定する方法としては、顕微鏡による観察だけでなく赤外分光分析法、ガスクロマトグラフィ、高速ガスクロマトグラフィなどがある。

2) 製作技法を知る

遺物がどのような物質で構成されているかだけでなく、分析で判明した物質がどのような技術や工具で加工されたかを知る製作技法の研究は、実体顕微鏡、金属・生物顕微鏡、電子顕微鏡などを使用してミクロの世界で製作技法の特徴を把握することができる。赤外線写真・紫外線蛍光写真（表面状態やかすれていて見えない墨書などの判読が容易になる場合がある）、X 線写真などの透過・断層写真等があり、内部構造や腐朽状態を知るために有益な情報を提供してくれる。

3) 年代を知る

遺物の製作年代を知ることは、歴史研究において極めて重要である。有機物遺物から試料を採取すれば、放射性炭素年代測定法によって絶対年代を知ることができる。その他の遺物についても、材質や知りたい年代によって、他の分析手法を選択することができる。

4) 産地を知る

原料がどこから来たのかを知ることは、考古学にとって大きな研究テーマである。蛍光 X 線分析によって得られた微量元素成分の数値を用いる方法や、青銅器中に含まれる鉛同位体比を測定して産地を同定する方法などが可能である。

施設としてサッカー地区の北施設群を想定する場合、建物に入ってくる砂や冷却水の問題があって、ここに精密な分析機器を恒常的に設置することができない可能性が高い。この環境に設置することが可能な分析機器は、蛍光 X 線分析装置、X 線回折装置、金属・生物顕微鏡などであると考えられる。その他の分析については、必要に応じて専門機関に依頼するほうが合理的である²⁴⁾。

③保存・修復のラボラトリーとして

保存修復のラボラトリーを持つことは、収蔵されている遺物の損傷状態から見て緊急の課題である。アブ・シール南丘陵遺跡から出土した遺物で修復が必要なものは、土器、石灰岩レリーフ、青銅器、木棺の木材と彩色などである。それぞれに適用する修復材料や技術の違い、温湿度などの環境設定の違いがあるため、本来は個別に土器や石灰岩の修復室、金属製品の修復室、木製品の修復室があることが望ましい。その他、修復情報を得るための分析機器を設置する分析室も必要である。分析機器については科学分析ラボラトリーのところで述べた部分と重複するので詳しくは記述しないが、必要最低限の機器として、金属・生物顕微鏡、蛍光 X 線分析装置、X 線回折装置、イオンクロマトグラフィ、X 線透過撮影装置などが挙げられる。

1) 土器・石灰岩レリーフの修復室

土器については、クリーニング→彩色剥落止め→脱塩処理→胎土強化→破片の接合→欠失部分の補修→補修部分の補色などの作業工程を行うことになる。脱塩処理には大量の蒸留水が必要となるために、蒸留水製造装置が必要不可欠である。石灰岩の修復については、重量物を修復のために自在に動かす必要がある。その他には手動フォークリフトやクレーンなどが必要になってくる。また、修復中に石の粉塵が発生するので作業の手元に集塵機を設置しなければならない。さらに修復に使用する合成樹脂から蒸発する有機溶剤がかなりの濃度になるため、排気装置が必要である。

2) 金属製品の修復室

金属遺物の修復は、通常以下のような工程で行われることが多い。クリーニング→錆の安定化処理→強化処理→破片接合→欠失部分の補修→補彩。クリーニングにはエアブラッシュ装置などを使用するために粉塵が発生する。あるいはクエン酸などの化学薬品を使用することがあり、溶液は排水規定に沿って希釈されて排水されなければならない。強化処理は減圧含浸装置を使用して減圧下で樹脂を遺物内部まで浸透させなければならない。ここでも合成樹脂を使用するため換気装置が必要である。

3) 木製品の修復室

木製品の修復は、クリーニング→彩色剥落止め→強化処理→破片接合→欠失部分の補修→補彩の順序で行われ、クリーニング時には埃が出るため電気掃除機などを使用して粉塵回収を実施しながら行われる。その他、有機溶剤の排気装置が必要である。

修復室全体で必要な物としては、実体顕微鏡などがある。

③展示場所としての遺跡倉庫の設備

遺跡倉庫にとって、展示場所としての機能はあくまで副次的なものである。そこで、一部の展示に値するような代表的な遺物が、スペースの都合に合わせて、いつでも見やすい場所に配置されていれば特別な設備は最小限にとどめることができる。むしろ、(1) ①遺物保管場所としての遺跡倉庫で述べたように、いつでも来訪者の関心に合わせて、収蔵遺物の取り出しが容易である遺物管理システムの確立が必要であると思われる。

(4) 小結

これまで述べてきたように、現在の遺跡倉庫で実施されている作業を考慮すると、21世紀の遺跡倉庫には複数の機能が求められ、それらの機能を果たすためには、今後設備の充実が求められる。

7. おわりに

遺跡の保存・整備計画は、まずは残存する遺構を中心として考案されるべきものであり、それに関連してイタリア隊がサッカラ地域において実施しているような遺跡のリスク・マップの作成は緊急課題である。しかし他方で、本稿で改めて見直してきたように、遺物は、それ自体が本来遺構と密接に関連するという性格を持つだけでなく、保管、整理・研究作業、保存・修復、展示等々の各取り扱い段階とも関連して、実は全体的な遺跡保存・整備計画に大きな影響を与える可能性が大きい。そこで、21世紀の遺跡倉庫は前節

で述べたような3つの機能を併せ持ち、それぞれに関連する設備を備える必要があることを提示した。現在、Selim Hassan Storage Museumを含むサッカーラ地区の遺跡整備は進行途中であり、今後次第にこの方向を見据えて設備を充実させていくことになるであろう。

さらに、遺物の視点から見ると初めて、エジプト全体の遺跡保存・整備計画が、実は各遺跡・地域単独では立てられない部分があることも良く見えてくる。例えば、それは遺跡倉庫の機能と関連する以下のような点である。

(1) ラボラトリー機能と関連して

各遺跡における遺物の扱いは、実際は全エジプト的な遺跡、博物館、文化財保存センター等の計画と密接に関連している。例えば、近い将来ギザに「大エジプト博物館 (Grand Egyptian Museum)」が建造される予定であり、そこに付属する保存・修復センターで多数の遺物の分析や修復を行えることになっている²⁵⁾。したがって、遺跡の倉庫でどの程度まで分析や修復を行うべきか、ひいては各地の遺物倉庫がどのような機能を担い、どのような設備を備えるべきかは、このような全エジプト的で大規模な保存・修復センターの役割にも影響されるであろう。なぜなら、例えば一部の科学分析や保存修復は、このような全エジプト的な大型施設で集約して実施することも可能だからである。

(2) 記録作成・情報発信機能と関連して

伝統的なエジプトの遺物管理・記録管理システムでは、公式登録された遺物の実物が紙ベースの台帳と一緒に管理されてきた。しかし、インターネットを通じたネットワークやデータベースの発達により、現在ではデータベースを使用した遺物情報の管理とインターネット上での情報の管理・交換・公開が技術的に可能になっている。

これまでのところ SCA の登録遺物をデータベースで管理するシステムは完成していないが、今後は、登録遺物のデータベース化が実施され、遺跡の倉庫に情報発信基地としての機能も求められる可能性が高いであろう。

エジプトのように、考古学的な遺跡と遺物を、観光を通じた経済資源として活用していく必要がある場合、遺跡や遺構と結びつけることによって、より豊かな情報を観光客に提示できる潜在的な能力を秘めた遺物を、無秩序に各地に分散させたり、倉庫に眠らせておくのは得策ではないに違いない。これからの遺跡保存・整備計画には、将来を見据えて、より良い遺跡・遺物の保存を考えるとともに、歴史に関する多様な情報を発信する基地としての遺跡施設群を念頭に置く必要があると思われる。

なおその際、これまでは保管・管理の都合上、公式の遺物としては扱うことができなかった多様な遺物からの情報も、学術情報の一環として組み入れていくシステムを構築していくことが望ましいだろう。

註

- 1) 本稿の本文は、2007年度および2008年度に実施した現地における観察並びに聞き取り調査を主な情報源とし、註に1991年以降の現地で見聞した事項等を加えた。
- 2) 計画策定は古く、着工は10年あまり前に遡るが、現在も建造が進行中である。
- 3) サッカーラ地区における遺跡調査は、19世紀から植民地主義の雰囲気の中で欧米各国の主導により進められてきた経緯があり、20世紀には外国調査隊が独自に宿舎や倉庫を建てていた。また、20世紀前半からエジプト各地の発掘調査で活躍してきたエジプト南部出身の発掘調査職人たち(グフティ)が住む集落も、SCA事務所の隣に建てられて

いた。イギリス隊の宿舎はエマリー（W.B. Emery）によって、フランス隊の宿舎はロエール（J.-Ph. Lauer）によって建てられ、いずれもエジプト学の研究史上重要な建物であったので、取り壊しにはやや残念な気持ちも残る。これらの取り壊しと新しい施設群の建造から、21世紀には欧米主導のエジプト学に決別しようとする意図がくみ取れるであろう。

- 4) この博物館は、20年あまり前からロエール氏によって建設が提唱されていた博物館が原形となっていると思われ、サッカラ地区の中でも特に階段ピラミッドが中心になっている。
- 5) ここでは中央に階段ピラミッド複合体の模型が設置され、SCAとナショナル・ジオグラフィックス社が共同して作成したサッカラ地区における発掘調査の様子がビデオ上映されている。
- 6) かつて、サッカラ地区のカフェテリアはセラベウム近くに設けられていたが、旧カフェテリアも一部を除いてすでに取り壊されている。
- 7) 倉庫名に冠されている Selim Hassan（1886-1961年）は、20世紀前半から中葉にかけて活躍したエジプト人のエジプト学者であり、カイロ大学教授の後、考古庁長官を務め、ギザやサッカラの発掘調査で業績があった人物である。
- 8) ただし、カエムワセト王子は古王国時代の建造物から石材を再利用していたので、一部古王国時代のレリーフも含まれる。
- 9) カエムワセト王子が建立した石造建造物は、丘陵頂部最大の遺構であり、丘陵が周囲の砂漠よりも約30m高くなっているため、当時の都メンフィスやメンフィス・ネクロポリスのどこからでも眺望することができた。
- 10) レリーフ断片は、発掘調査で検出された時点で、それぞれに固有の「遺物番号」が与えられ、出土位置が光波測距儀で測定され、出土年月日と出土層位が記録されている。
- 11) 倉庫内に納められている遺物の①基礎記録の作成の作業は、すでに完了している。
- 12) Selim Hassan Storage Museumに収蔵された登録遺物については、現在倉庫のダイレクターである Ramadan Hasem el-Sawd氏によって、データベースが作成されつつある。
- 13) SCAの登録作業は、発掘調査期間の終わりに実施され、すでに完了している。
- 14) カエムワセト王子の石造建造物のレリーフ装飾は、石灰岩石材だけではなく、石材同士を繋ぐモルタルや石材表面の傷に埋め込まれたプラスターの上にも施されている。多くのレリーフ断片は比較的保存状態が良好であったが、石材の保存が良好な場合でも、モルタルやプラスターは容易に剥がれそうな状態であった。
- 15) 少なくとも第1次から第6次発掘調査の間は、全てのレリーフに緊急のパラロイド処理を施すことにしており、対処方法は保存状態に合わせていくつかに分けていた。石材自体の劣化を含む保存状況の悪い大型ブロックについては、SCAのサッカラ事務所に所属する専門修復師に保存処理を依頼した。その他、同遺跡出土の大半のレリーフ断片については、出土年次内に、倉庫内もしくは倉庫北側の日陰の風がない環境において、表面にパラロイド B72 の7%前後の溶液の塗布を行った。
- 16) 旧倉庫から新倉庫に遺物が移動される際に、調査隊員は移動に立ち会っていなかったため、旧倉庫において、ある程度実現されていた分類と秩序が乱れてしまった。
- 17) 今期調査中に、写真撮影に先んじて、コンテナに収蔵されているレリーフ断片の保存状態のチェックとクリーニングに着手した。今期中に全ての断片の作業を完了することはできないため、石造建造物のポルティコ南壁上段を飾っていたと推測される「供物奉納場面」から作業を行った。
- 18) 表面に汚れのない小型レリーフに関しては、すでに大半の断片の詳細観察と記録が終了している。ただし、小型断片は従来メモ写真が撮影されたのみであったので、今年度から精度の高いデジタル・カメラを用いた写真撮影を開始した。
- 19) 旧倉庫内において、第6次発掘調査の出土断片までは接合作業を試みていたが、その後旧倉庫のスペースが手狭になったため、接合作業が滞っていた。
- 20) 例えば、10年あまり前にブバスティス遺跡を訪れた際、19世紀末に発掘された第22王朝オソルコン2世のセド祭の場面をレリーフで刻んだ花崗岩の大型ブロック（Navielle 1891）が、現地にそのまま残されていた。このように、遺構との関係が重視されるために、現在もレリーフが屋外保存されている例は各所で見られる。
- 21) その理由は、レリーフはいずれ建造物＝遺構に戻されるべきものであり、博物館には収められないため、と説明された。それは、先に述べたようなレリーフと遺構との関係を重視した方針にしたがっている。
- 22) 完形ではない土器片については、かねてから各調査隊に取り扱いが任されており、発掘調査時に完形土器や特徴的な土器片のみをピックアップして倉庫に収め、その他多数の土器片については、調査現場の近くで分類・作業している調査隊が多い。このような場合、ときに調査後の土器片の管理が難しく、発掘後の廃土と同様に、遺跡における遺物分布状況に影響を与えてしまうかもしれないことが危惧される。

- 23) Selim Hassan Storage Museum には、すでに火災対策のためのスプリンクラーが設置されているようであった。これが常に有効に稼働するようなメンテナンス・システムの確立が望まれる。
- 24) アブ・シール南丘陵遺跡の調査は、すでにポータブルの X 線化学分析等の機材を倉庫に持ち込んで、遺物の分析を実施した例がある。近年の例として、中井他 2006, 2008; 中井、タンタラカーン 2007 が挙げられる。
- 25) 大エジプト博物館の保存修復センターは、2009 年中に開館する予定である。また、このような保存修復センターは、オールド・カイロに建設中の「文明史博物館」にも備えられる予定であるという。